



長倉先生との思い出

Yukako Ohashi 大橋ゆか子 長光会, 文教大学元学長・名誉教授

理学部化学科の4年生になり、大学院の研究室選びで、本郷キャンパスを離れた物性研究所を選んだとき、心細さもありましたが、新しい環境に飛び込むことに新鮮な喜びもありました。長倉研究室の昭和40年度M1生の私たちは4人おり、4月〇日〇時に研究室に伺うという連絡をいただいていた。ところが、その日、集合時間に準備室にいたのは私1人、2人目は遅れて到着、日にちを間違えたのか、後2人は結局この日、来ませんでした。顔合わせは、仕切り直しになりました。こんな形で研究室生活が始まったので、長倉先生は驚いていらしたでしょう。

この頃、長倉先生は研究や学会活動で、非常にお忙しい時期でした。分子化学研究所開設に向けた準備の時期でもあったと思います。私たち修士学生の指導は担当の助手の方々に任されておりましたので、先生とは週1回の研究室セミナーでお会いするだけで、直接お話しすることはほとんどありませんでした。研究室セミナーでは、時々、先生のカミナリが落ち、報告者でなくとも縮みあがることもありましたが、終わってから学生同士で、あのカミナリはどこが原因だったのだろうと不思議がったこともありました。

この時期は、大学闘争直前の時期でもあり、物性研は院生の数も少なく本郷キャンパスと離れていましたが、大学院生で集まって話し合いをしたりしていました。長倉先生は心配しておられたようで、内容は覚えていませんが、1回だけ注意されたことがあります。先生とお会いする時間はほとんどなかったこともあり、若かったので先生の考えに思いを巡らしたりせずにいました。D2の夏、東大闘争が広がっている中で、私は結婚することになり、そんな状態にもかかわら

ず、長倉先生に結婚式の出席や祝辞をお願いしたところ、引き受けて下さいました。

博士課程修了の頃は就職難であり、正規の就職先が見つかりませんでしたので、理化学研究所の流動研究員という形で、お世話になりました。物性研究所や理化学研究所には、研究を支える金属加工や硝子加工などの技術部門があり、未熟な学生の相談にもものつてくれて、多くのことを学びました。結局ポスドクの7年を長倉研で過ごした後、畑違いの文教大学教育学部に就職しました。

教育学部は、文系、理系、芸術系、体育系、教職系などの専門分野の異なる教員の集合体であり、知識的常識が多様多様でした。この中で自分の考えを主張して理解者を増やすには、長倉研時代に養われた思考システムが大変役に立ちました。多様な価値観の集団の中での議論でも、問題点のデータを集め、分析し、図式化、グラフ化することが有効でした。

教員を目指す学生たちと接する中で、理科があまり得意でない学生たちに、科学の魅力、化学の考え方を伝えることが楽しみになっていました。学生に愛着を持っていたので、最期の4年間は学長を務めました。そのとき、思い出したのが、長倉先生の姿勢でした。個人的・私的立場に拘束されず、大局を見て行動すること、ときには、嫌われてもはっきり意見を伝えることです。長倉先生が、私たちのようにいろいろ面倒をかける学生を弾じき出さずに、大きな目で見育てて下さったことに、心から感謝しております。

長倉先生のご逝去を心からお悼み申し上げます。

© 2021 The Chemical Society of Japan